

郷土を知り、郷土を愛する

志木市 歴史とんぼ

—— 執筆・協力 志木のまち案内人の会 ——

第63回 新河岸川改修碑

武蔵野台地に沿って西から流れて来る柳瀬川を新河岸川が志木市役所の所で受けて下流に向かい、その流れが志木のまちを南西部の台地と東北部の低地に分け、東北部の低地宗岡地区は東を荒川の流れて囲まれています。この宗岡地区は古来、水害を頻繁に受けてきました。江戸時代以降の特に大きい水害だけでも、天明6年(1786)、弘化3年(1846)、安政6年(1859)などがあり、小規模のものまで含めれば毎年のことだったのではないのでしょうか。このような度重なる水害は、荒川・新河岸川・柳瀬川の沿岸の町村に共通する災害でした。

荒川の沿岸である飯田新田村(現さいたま市)に生まれ、水害によって住民が苦しむ様子を見てきた齋藤祐美は、沿岸住民の苦難である大洪水の災害をなんとかして取り除こう

と、治水を終生の仕事にすることを決心しました。

齋藤祐美は、明治30年から昭和11年までの約40年間、県議会議員として7期在任し、議長も3期務め、在任中は水害問題の解決に奔走しました。明治時代になり、度重なる水害の度に関係町村長が政府に河川改修を陳情してもなかなか聞き入れてもらえませんでした。明治43年の大水害を機に、荒川・利根川・渡良瀬川の治水事業の促進のために埼玉治水会が結成されると、齋藤祐美は幹事として大活躍し、問題解決に大きな役割を果たしました。

荒川の改修工事は明治44年から始まり、新河岸川の改修もやっと大正10年から9年継続事業として開始されました。その改修工事は、①川の屈曲部分の直線化、②荒川との合流地点を朝霞市・和光市の境界付近(川の口)から岩淵水門までに延長、③いろは橋付近に洗い堰と宗岡閘門を設置、④左岸のみにあった堤防を両岸に築造するなどがあり、改修工事後は、沿岸各地の水害は格段に減少しました。

荒川と新河岸川の改修が、齋藤祐美の献身的な努力により成し遂げられたことは、多くの人が認めるところであり「治水翁」の名でその偉業は称えられました。荒川に架かる治水橋は治水翁に由来します。いろは橋の宗岡側橋畔のポケットパークに建つ「新河岸川改修碑」は上記のような「治水翁」の功績を称えています。



▲新河岸川改修碑



本年も大変お世話になりました

今年も残すところあとわずか。振り返りますと、皆様の温かいご支援、ご協力をいただくことで、さまざまな新しい取組を形にすることができた、実り多き年となりました。今年も大変お世話になりありがとうございました。

今年前進できた取組としては、まず、子育て施策の充実に向けて、親のリフレッシュなどを目的として実施している「産後ケア事業」について、多胎児や低体重などの医療的ケアを必要とするお子さんを受け入れられる医療機関を新たに増やしました。こうした受入体制の拡充も一つの要因となり利用者数が大幅に伸びるなど、子育て世代を支える取組として大きな成果を上げることができました。

また、教育の分野では、他市に先駆け市内すべての中学校区において小中一貫教育がスタートしました。各中学校区を一つの学園として位置付けて、それぞれの地域の文化や特色を生かし9年間をひとつながりとした質の高い教育に取り組んでいます。加えて、全国的な課題である不登校対策は、県内でも初の取組として不登校の生徒が自分のペースで安心して過ごせる居場所である「校内支援ルーム」をすべての中学校に設置し、併せて一人ひとりの悩みに寄り添って支援する不登校対策の支援員もすべての中学校に配置しました。教育サポートセンタ

ーや学校とも密接に連携した取組により、複数名の生徒を教室復帰へつなげるなどの効果が現れています。

さらに、10月には、本市の後世に残る新たな目玉事業「シキリラ」が開催されました。当日は雨模様でしたが、約6,500人の方々にご来場いただき、いろは親水公園は温かな光とたくさんの笑顔に包まれました。会場では、多くの市民の皆様と直接お話しする機会にも恵まれ、地域への思いや温かなお声をいただき、皆様と心を通わせることができたひとときでした。

今年は私自身にとっても、市長として4期目の新たなスタートの年でもありました。この4年間では、全国的に人口が減少していく状況下においても「選ばれ続ける志木市」を実現することを強く意識し、そのために必要な取組をまとめた「新・しき躍進計画35」の5つの大きな柱「健康・共生」「すくすく子育て」「魅力・活性化」「快適な暮らし」「持続可能」を中心に施策を力強く推進していきます。

また、令和8年度からは未来を見据えてスタートする今後10年間の羅針盤である「第二次志木市将来ビジョン」にお示しした、まちの将来像「よりそう想い 広がる絆 いいね! がいっぱい 志木のまち」を目指していきます。

「師走」は、年末に師＝僧侶が忙しく駆け回る、年末の慌ただしい様子が由来とされていますが、「年果つ」が変化したものという説もあります。年が終わる、年が果てるという意味ですが、「果て」と「果実」は同じ漢字を使います。年の終わりに地道な取組や努力が実を結び、その種が次の年の豊かさにつながる。師走にはそんな意味も込められているのかもしれません。

2026年も皆様の「市民力」とともに、笑顔と活気あふれるまちづくりを丁寧に進めてまいります。皆様にとって、そして志木市にとって良い年となることを心から願っています。